

記述から、一般人も既に遍路をしていた。戸坂(愛媛県西予市鳥坂)の庄屋は「辺路も数度」と書かれ、重ね打ちをしていた人もいたことがわかる。

説経節を読む——宗教研究としての読解の試み——

千葉 俊一

発表者の研究目的は古典文芸・芸能に顕れた仏教思想を読み取ることである。しかし、それは經典思想や日本仏教の宗祖たちの思想の直接的反映ではない。大乘仏教の重層した変容の結果である日本仏教がさらに変容し、在家民衆の生活において血肉と化したものである。発表者はこれを「生活の中の仏教思想」と呼びたい。中世文芸(芸能)である説経節にこれを読み取ることが発表者の当面の課題である。

説経節とは武家・公家・豪農の子弟が惨憺たる苦難(ことに愛別離苦)を味わった末に栄華を回復する、ないしは死後神仏となる(あるいはその両方)という筋立てを持つ語り物である。発表者は説経節を質・量ともに代表する五作品、『さんせう太夫』・『しんとく丸』・『をぐり』・『かるかや』・『まつら長者』を考察対象とし、説経節先行研究の仏教との関係を論じてこなかった問題点を意識し、かつ恩愛を説経節の核心としてきた視点を引き継ぎながら、「生活の中の仏教思想」をとらえていきたい。

「生活の中の仏教思想」は一般的に作品の中に自立した言説としては現れず、登場人物たちがその中で生きているところの社会制度や情念等をいわば「依代」として現われると発表者は

考える。説経節の場合、恩という仏教思想が家制度と愛の情念に宿ることで恩愛という「生活の中の仏教思想」となっている。

説経節五作品の主人公たちは正統な家長後継者でありながら様々な理由から排除され辛苦を味わうが最後には家督を手にし栄華を極める(家督を自ら放棄する『かるかや』は例外)。つまり家督をめぐる苦闘が説経節の基本構造なのである。ところで、「家」とは擬血縁的な機能集団であり、純粹な親族集団のことではない。しかし、説経節では家督をめぐる苦闘の担い手はほとんど親子・夫婦・姉弟という親族集団に限定されている。そうさせているのは説経節の受容者たる中世民衆の生活世界の愛の情念と思われる。説経節が基本的に前提としている武家社会の家制度を民衆は自分たちのものである愛の情念を通して理解したところに恩愛という「生活の中の仏教思想」が宿ったと思われる。

登場人物たちが始終涙に暮れて生き別れたあるいは死に別れた肉親を恋い慕うという描写が説経節を特徴付けている。説経節先行研究が指摘してきたように、こうした恩愛が説経節の核心であることはまちがいない。しかし恩愛は先行研究がしばしば誤認したような近現代の家族愛とは違う。

「恩」と漢訳された原始仏教思想は、他者から受けた恵みの自覚とそれに対する感謝と返報という観念であった。それが中国において儒家思想の内に受容され報恩としての親への孝にほとんど収斂されることになった。だが、その「恩」には四恩説に見られるように、如来や三宝という普遍的・超越的な価値への志向と、父母ないしは国王という個別的・現世的な価値への

志向の両者が併存することになる。仏教思想と儒教思想の両者を担ったこの「恩」は中世日本の封建社会において、先に触れた家制度のうちに和辻哲郎のいう「献身の道德」として展開した。但し、前述したように民衆はそれを仏教流入以前より強く生きている愛の情念によって解釈し、そうしたウエットなものが説経節をはじめ『平家物語』や『曾我物語』といった語り物に顕れている。愛の情念、といってきたが「愛」は經典思想では肯定・否定の両面をもつ。たとえば『俱舍論』では肯定される不染汚とは師や有徳の人々への愛情であり、否定される染汚とは渴愛であり子や妻等への愛情である。前述した「恩」の個別的・現世的な価値への志向と、「愛」の經典思想が否定する面がからみあつて日本における「恩愛」という「生活の中の仏教思想」が顕れたと考えられる。

職人巻物の宗教性——船大工巻物の基礎的考察——

小池 淳一

船大工は造船の技術を持つとともに、船に宿り、船および船に乗る漁師等を守る民俗的な神霊であるフナダマ（船霊、舟玉などと表記される。以下、船霊とする）を祀り込めたり、祀り直したりする呪術を担ってきたことが民俗研究から指摘されている。船霊の祭祀対象物自体は全国的に類似しており、一つの中心からの伝播が推測されてきたが、その本源は明らかになっていない。一方で船霊祭文を正面から取りあげる調査・研究は少ないが、そのなかで東北における川島秀一の「船霊様」（『漁撈伝承』二〇〇三年）は祭文をとりまく状況にまで目配りした

もので注目される。

ここでは岩手県宮古市の北村造船所に伝来した「船大工秘事十二通（船大工秘事之事）」（文久四年・一八六四、現在、岩手県立水産科学館蔵）を取り上げて分析を試みる。これは北村造船所の初代、徳松氏が三重県の伊勢志摩地方で修行して、造船の技術を身につけてきたなかで入手してきたものだといわれている。冒頭の「船造時諸々木ヲ集斫立之大事」に始まり、「柱立之大事」に至る十三の細目が示されており、「御船霊納様事」では、人形・穀物・賽子・錢などを「槌ヲ打」、「祓」を読みながら船中に納めるものとなっている。船霊としては、「五社御船霊ノ事」「七社御舟霊之事」として、船霊として独自の神格が指定されているわけではなく、十二船霊となるように十二柱の神々が何とか集められているという印象が強い。

巻物の文字は全体を通じて丁寧に写されているが、それほど難しくない漢字を誤っているなど、写した人物は必ずしも文字文化の住人ではないことが推察される。その一方で、鉛筆で読みがつけられており、この巻物は近代のある時期に声に出して読むことが必要であると認識されていたことがうかがえる。

つまり、船霊祭文とは船大工が音声として儀礼の場で披露することが重要だったのであり、このことは、三陸各地において巫女が船霊祭文を読誦していたこと（川島前掲論文）と考え合わせてみるべき問題であろう。それがやがて川崎晃稔が指摘するように南島において船大工が「御手形箱」に「船卸祭乃祝詞」を墨書して記録するようになってきたものと考えられる（川崎「船霊と刳舟」『日本民俗研究大系（五）』一九八四年）。船霊を